季寄
註解 改正月令博物筌 五月部 二

0-58
俳諧資料カード
年代
編者（筆者）
書名
備考
（下垣内蔵）

五月之部目録

△印ハ俳諧の季を持ものゝ

○養生の法○風雨の異○米の豊凶○妙薬其外人家重法の事ハ所々に多ある故目録ニハ不載

五月

卦　月支　諱字　陰陽生　異名

朔日
△芒種節　△梅雨　五ノ一丁
△夏至中　五ノ四丁

三日
△菖蒲　五ノ五丁
△菖蒲輿　五ノ六丁

四日
菖浦茸　△蓬　五ノ七丁
△内膳司供早瓜　五ノ八丁

五日
五日節會　五ノ十丁
△左近真手番　五ノ十一丁

五日
△上加茂足揃　五ノ十二丁
△松本祭　五ノ十三丁

日々
此部ハ五月日の定りなる事ハ其のまゝなること紙あるす

△左近ゑ手番　△右近真手番　五ノ十四丁
△右近ゑ手番

△騎射　△馬弓　五ノ十五丁
△端午節　△端五　△重五　△重午　五ノ十六丁

端午男女衣服　五ノ十七丁
生花の式　五ノ十八丁

文庫

五月 目録

菖蒲引 永根
菖蒲葉 菖蒲槍 菖蒲かづら 菖蒲帯 ちまきの帆
菖蒲酒 十丁
菖蒲湯 蘭湯 菖蒲湯 十丁
菖蒲冑 削懸の甲 十丁
懸 かさり甲 五十
印地打 十丁
薬日 製神殿 十丁
薬玉 十丁
長命縷 続命縷 五月王
薬草摘 茅州 十丁
競刈 十丁
闘百州 草合 十丁
神水 十丁
五月鏡 酒鏡 十丁
粽 角黍 十丁 茭粽
笹粽 飾粽 鍾粽 拝鍵粽 茲粽 九条粽 芦粽
柏餅 十丁
射粽園 十丁
退水神 十丁
桃印府 赤昊府 十丁
艾人 蒲人 十丁 戴艾虎
画天師 十丁

大月

去鴟鴨舌 十丁
泉羹 鳥のあつ物 十丁

八日

競渡 鳥車 十丁
水馬 十丁
賀端午 文月 十丁

九日

加茂競馬 きくい馬 十丁
藤森祭 十丁

七日

生玉流鏑馬 十丁
関明神祭 十丁

六日

菖蒲 十丁
今宮祭 十丁

日

宇治祭 十丁
植竹 全宝寺 竹酔日 竹迷日 十丁

日三十

室祭 十丁
今宮祭 十丁

日五十

面社祭 十丁
有無日 十丁

日五九

虎涙雨 十丁
住吉御田植 十丁

日八九

山田御田扇 十丁
祇園会 虎 十丁

晦日

月令 此部ハ日の定まりなし 五月一月の心なるを

最勝講 十丁
賑給 十丁

富士ざり 十丁
大宮外宮田植 十丁

瀑布 麻布 生布 木平 半ましり 十丁
さし賣

△半夏生　北ノ丁
△大原さう　北ノ丁
△縮　草りの花　北ノ丁
△覃羽織　北ノ丁

時令

此部ハ七月の時候よりくるくるしるし

△五月雨　△梅雨　△はつつり　北ノ丁
△五月闇　北ノ丁
△白さく　北ノ丁

草木

此部ハ五月一ヶ月の草木のるいをあつむ

△梔花　△雲ゝ　北ノ丁
△山梔子花　北ノ丁
△柘榴花　北ノ丁
△黐樹　北ノ丁
△女貞　北ノ丁
△南天花　北ノ丁
△栗花　北ノ丁
△杜鵑花　北ノ丁
△要花　北ノ丁
△合歓花　北ノ丁
△榊花　北ノ丁
△百合花　北ノ丁
△車百合　北ノ丁
△姫百合　北ノ丁
△児百合　北ノ丁
△唐百合　北ノ丁
△袂百合　北ノ丁
△鬼百合　北ノ丁
△糸百合　北ノ丁
△蠶陽花　北ノ丁
△紅花　北ノ丁
△天門冬花　北ノ丁
△蜀葵　北ノ丁
△錦葵　北ノ丁
△龍葵　北ノ丁
△萱艸花　北ノ丁
△下毛花　北ノ丁
△金盞花　北ノ丁
△金錢花　北ノ丁
△金銀花　北ノ丁
△夏菊　北ノ丁
△茴香　北ノ丁
△時計草　北ノ丁
△威灵仙　北ノ丁
△鼠李　北ノ丁
△美容柳　北ノ丁
△未央柳　北ノ丁
△酢漿草花　北ノ丁
△蚍蝨子　北ノ丁
△蔵茉花　北ノ丁
△草石蠶　北ノ丁
△蔬奥花　北ノ丁
△天南星花　北ノ丁
△苦花　北ノ丁
△朝菊　北ノ丁

△豌豆引　五丈　九八丁
△蠶豆引　五丈　九八丁
△花且見　五丈　九八丁
△花菖蒲　五丈　九八丁
△菖蒲　五丈　九八丁
△雪下　五丈　九九丁
△朝露州　五丈　九九丁
△長根草　五丈　九九丁
△蛇帳鈴草　五丈　九九丁
△玄及　五丈　九九丁
△葬花　五丈　九九丁
△藻花　五丈　九九丁
△鉄線花　五丈　九九丁
△槲子　五丈　九九丁
△麥　五丈　九九丁
△存　五丈　九九丁
△かいこ　△ぶどう　△ぶどう　△ぶどう
△田植　五丈　九九丁
△早乙女　五丈　九九丁
△田歌　五丈　九九丁
△田草取　五丈　九九丁
△早苗　△若苗　△玉苗　五丈　九九丁
△菱花　五丈　九九丁
△若竹　△竹秋　五丈　九九丁
△竹品類　五丈　九九丁
△艾刈　五丈　九九丁
△真菰刈　五丈　九九丁
△石菖　五丈　九九丁
△和布刈　五丈　九九丁
△海帶刈　五丈　九九丁
△李子　五丈　九九丁
△楊梅　五丈　九九丁
△氣條桃　五丈　九九丁
無花菓　五丈　九九丁
△天仙菓　五丈　九九丁
△桃　把　五丈　九九丁
△青梅　△梅漬ル　五丈　九九丁
△梅と干も　△梅ぼし　△梅むき
△杏子　五丈　九九丁
△櫻桃　五丈　九九丁　季ハ三月
△桑実　五丈　九九丁
△青月小柚　五丈　九九丁
△薑　五丈　九九丁
△生胡桃　五丈　九九丁
△早松茸　五丈　九九丁
△茄子　五丈　九九丁
△新茄子　五丈　九九丁
△瓜花　五丈　九九丁
△早瓜　△淺瓜　△白瓜　五丈　九九丁
△胡瓜　五丈　九九丁
△姫瓜　五丈　九九丁
△栗蒔　五丈　九九丁
△秤蒔　五丈　九九丁
△秬蒔　五丈　九九丁
△胡麻蒔　五丈　九九丁
△種植　△ウエル　五丈　九九丁

生類

此部ハ五月一ヶ月もろくのいさ去をまつ先しるす

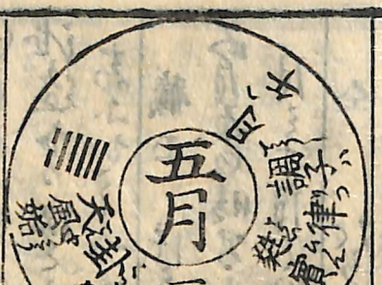
△獣狩　五十丁
△鹿子　五十丁
△水雞　五十丁
△永鳥巣　五十丁
△毛ヶ賀鷹　五十丁
鵙鳴初　五十丁
△蛆　五十丁
△小鯀　五十丁
△蛇脱皮　五十丁
△照射　五十丁
△魚簗打　五十丁
△黒鴨　五十丁
△諸鳥差替　五十丁
△羽脱鳥　五十丁
△鶯収音　五十丁
鶉の巣　五十丁
△初蟬　五十丁
△蟬の智　五十丁
△蠅子　五十丁
△蟬　五十丁
△蟬蜆　五十丁
△水馬　五十三丁
△鼓虫　五十三丁

五月必用

此部ハ風雨の占。破軍の向方。日取の吉凶。他行の心得。作事の心得。祥理祓ひの法食物の好悪等その外重法のこと品々あつむ尤日の定りなる事ハ日令の部にあり爰ハ日のさだまりなる五月一ヶ月の要用のみをあつむ

五月之部

△印ハ季を持つりのみ



冬至ハ一陽生ずる如し夏至ハ又一陰生ずるに陽極まって陰生ずるなり

○天風姤ハ女の荘んなり剥ハ家をとりたつし不貞のなりなり

異名

△仲夏　△鶉月　△皐月　○南訛　○蒲月　○夏

五△夏半　盛夏　△蕤賓　△さ月　△早苗月　いつゝろ月　△むつのいろ月　たくさ月　莫傳又出　吹去月　藏玉又出　△たちまる月　△さゝ月　△月ゝを月

異名註

△仲夏ハ夏のなかゝ　△鶉月ハ月令ニ曰鶉首といふる故名づく鶉首ハ星の名なり。南訛ハ書経

こハ平秩南訛とあり夏時物のさかんになり變化をなすべきことなり

○蒲月 蒲ハ菖蒲の事也○夏五 夏のなかば△夏半 是も夏のなかば也 盛夏 なつの盛なり

△蕤賓 蕤ハ下にたれて主也 賓ハ客也 陽氣上きはまると陰氣主人となりて客と敬するの義なり 即ち五月の律なり○早苗月ハ早苗とる月なれハなり○さ月 さなへ月を略せるなり

㊂秘藏 さくを月

池邉なる げにも時もおやめ刈 東かざしつ さくも月そて

藏玉 はさゝを月

五月雨の晴間もみえぬ雲まや 月さす月といひてしめさん

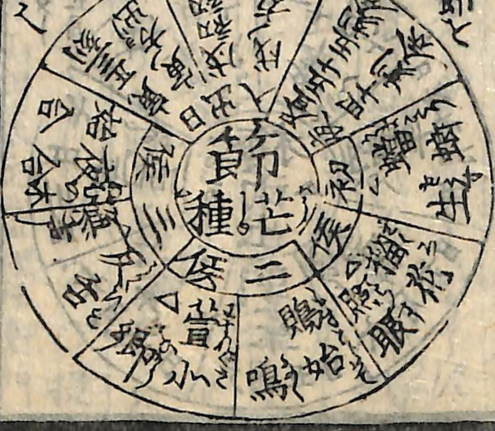
仝 たちまれ月

やよい代より橘月の名にさえて まのふむとのたもひそらん

節

△芒種○七十二候○草木七十二候○晝夜長短○日の出入等左に記す

五月の節を芒種と云ハ芒ある穀稼生じて種をうべき時なるを以て名付る之



○蟷螂生ずの氣ハ陰なり此月一陰下に生ずるより微陰の氣に感じて蟷螂が生ずる此虫ハ物に向ふ時ハいかりてあらそふ

○鵙ハ陰類物を殺して害する鳥也 一陰の色が好氣の生ずるに感じて鳴なり○反舌ハ鶯なり是ハ春の始陽氣を悦んで来り鳴く一陰の氣をまけて音を入るなり

節右候

今日雷なれば豊年あり○雨降れば旱の兆稲多く空し○芒種の雨一寸過ぐれば梅雨一尺に當るしかは是をそなふる此日雨ふまざれば多くは旱○雨あるくいくも多くは○日中小一丈の竿を立て影を測る四尺二寸二分なれば成熟す

梅雨出の説

次の九の内に記す支干年のはじめ出る

史人の説多し時珍の説に五月節に入て後壬の日入六月節後壬の日を出る本朝これを用いるべし正しからず

按るに五月梅まさに黄に落んとす柘榴の花ひらき栗の花

さち蟄の子ちまちふ曜るの比長雨あり是を梅雨といふ雨甚だ多くすしいくもかすみて石ぞ人ぞり物ひとを生ぜ雷鳴を以て出梅とす○京師烏丸中立賣下ル町のちまち又大徳寺門前の人家のけしろ井より梅雨の穴あり其時に至れば水ましいづる晴んとすれば水かわく○摂州丹生の山田栗花落理左衛門宅に井あり程三尺深サ一尺梅雨に入て水必ずく出梅の比水かわく

梅雨天氣

梅雨い多く西風南風そ山の端に雲あく風アれば時いふて風ふれば空に雲多く天氣くくくれどふり出ぬ是を分るとして此雨の内朝東風二三日はくあて吹ば空も白くなる是を船頭風とて雨ふること○雨ふんとして

とゞまく雷鳴これを頻々手然
るのゝ梅雨の内は雷少く
鳴ハ洪水と主る夜鳴り或ハ沖へ
ゝり入るものいまゝで宜し

(兼)新題林　重條

暑さ熱の去る弁はしけ
雨ふ色はく梅もめ〳〵し

(連)匂へ蓋やとハ梅の面昌林
ハ花のゝ〳〵ふ色を梅の面紹巴

(詞)ハ白さハ黒さく〳〵きゝ
かびゝる。おけ〳〵たく

(俳)菖蒲酒も六〳〵や彩の梅酒貞徳

妙術

梅雨水

蝨を入貯へ置べし
茶を煎すれば甚美
癬疥を洗へば其痕ゝそ〳〵
醤油を造るべ熟し易其外
衣を洗ふ用るべ灰汁ハ
去るべ水久しく貯へ
○はるゝてかびゝると去るべ
を用ひ頻さゝへ即ち溜る

梅雨

養生

梅雨中の湿を散る蒼朮を
火ゝ焼て煙とかぐべし雨湿て
病と生ずる〳〵

中

△夏至○七十二候○草木七十二候
○昼夜長短○日の出入等左記

節ゝ十六宅
夏至と云
八日輪
丑寅ゝ出て戌
陰
入南
の方
ゝ
ゝ日
の長さ
と至極
ゝゆ
夏至と
名付ゝ

中夏至　三候

蜩始鳴
半夏生
乃生
蜀葵
開
鹿角
解
蜘蛛
始
横
菖蒲
華
水
泉
動
日
長
至
極
小暑
至

鹿の角ハ三ツあり左右合
せて六ツゝ十二月ゝ一陽生
此月ゝ六陽終り一陰生ゝ
氣ゝ感して角と落を鹿ハ
ゝ六陽の氣と感して
六月ゝて生ゝ

いせこうり其声を聞くハ人の心とをゝしむる陰出る微陰を感じて鳴てハ蝉の初声ともいふ○半夏ハ暦の時候ハ也半夏生しまるゝて種物とぐすゝ古代より此前後を以てうゆる物多し其時をちぐゝど生ずる草なり

夏至天氣占候

夏至の日ハ西南の風あれハ六月ハ洪水あり○晴天なるまゝ六月暑氣つよく旱く○北風吹ハ水さゝうゝて夏中タ立多く米穀ゆとゝく○夏至中旬ハあまゝ豊年なり下旬ハあまゝ米價貴し○當日雨ふる仏淋時しゝて久雨と主る○黒雲多ハ水難しなる○日ハ暈あまゝハ洪水なり○雷鳴ハ六月ひでり甚し○午の時南方ハ赤雲あるハ五穀大ハなる赤雲なく日月ハ光なくハ五穀ふゝ〜を人病多し

今朝雲の行くゝをゝて

夏至養生

夏至の當日井とさゝゝ水を改まハ瘟疫と病ぜ○夏至の日夫婦の交りをなすと仏忌む千金方ゝ出しゝり○月令ニ此日韮ハふく其外さきりのを食せゝと滋欲を犯をるゝゝとゝり今日日の長き事極る。陰陽爭天地死生ふてゝり男

子斎戒して声色を止め騒事なく心氣を定め保養をべき日なり

日令

此部は五月一ヶ月日の定る事支の定る事を記と

朔日 **天氣** 今日晴天あれば五穀よかるべし○雨ふりて大風を畢米價貴し北風は猶さら悪し○東風半日吹は終日吹は米の價貴し **養生** 今日沐浴されば無病ふして老ひず **京** ▲上賀茂足撫

(俳) 落くるぶしふ月 えやはそろへ 凡雪 **近江** ▲松本祭

神は平野大明神

○松ヶ崎水室祭

二日 **南都** 眉間寺聖武帝三尊像開帳

三日 **天氣** 今日晴五六 篠あり

献菖蒲 今日内裏へ奉るとなり

菖蒲輿 左右の近衛兵衛の六府あり 之の輿と南殿の階は東西より立又時の花をかざりなり

京 高雄虫干三日より九日まで

四日 **菖蒲葺** 屋根の軒に置とふく

(秀) 玉葉集 公雄

今日はあやめ葺そふ

形ちふるる菖蒲の宿

(俳) 菖蒲ふく 形所の形つき起波

此頃より盛夏よりの毒虫多く生るふる軒に蓬菖蒲をかざるも虫の入らぬまじなひ

蓬草 是もあや同し **江戸** 三の輪祭

楝背 俗ふせんぐえ **内膳司**

供早瓜を山城の御園より供ゝ奉るなり

五日　不成就日　天氣　本朝氷賈の諺ふ四ィが三

五が五といふことあり四月三日と今日との晴を以て豊凶を定め價の高下とする晴と豊年曇を凶年とするなり

五日節會　天子武德殿に出御ありて宴會を行はれ群臣に酒を賜ふ人々皆あやめのうづゝとかくる典藥頭はくえを奉る事をもとおりと公事根元に出

左近真手番　左近の馬場にて騎射をする事なり右近の馬場にて六日に是をひきなりの日といふ今日近衛の隨身褐の尻を引折てきるゆゑひきなりの日といふ左近のあゝ手番は五月三日右近は六日なり（能）人の愛はゆゝしきなり

騎射　馬引くへる山川　五月五日豊樂院に昔は弓を御覽せしとあり是を馬弓といふ

（事中行司）服よりあるめ屋こくきをとひらちはまゆゝ今やらしん為盛

端午の節　端五といふ初五といふが如し月は今年の五の始なり日は今月の五に始る端といはんもそでゆゑも訓ず或は五月五日ゆゑ重五ともいふ又午の月なるゆゑ端午とも書く一説に午は五の字と通用をもつて

五日異名　重午　重五　端五　端陽　地臘　蒲節　解粽　天中　迎節　朱符

異名註

△重午午の月昔は午の日を用ひられがゆゑなるべしまた△重五五月五日なれば也。解粽節はちまきをとくべし。

○端陽は正陽に同し。地臘は一陰生ずる故其外の異名文字のよしにありてこれを

芝節 此日蓬を作る虎を門に掛けて邪氣を拂ふ也

端午 衣服 今日より帷子に着す 袴なども色又淺黄

女衣服

女もひとへのうすものかさびくし上襲はもえぎのおもてうらかさねふをもえぎの色筋をしるしをめもとゝ節句は花あやめのもゆるもの或はむらさきいろ

生花之式正

菖蒲 花菖蒲 石竹 蓬

菖蒲引

菖蒲苏 ㊇ 新勅 前関白

深さはまきふかくあやめ草年の緒ながくたまをぬくとか

夫木 寄菖蒲祝 為相

君が代はいとゝうひまこそなけれのくさとうれあやめなるとなりを

夫木 江中菖蒲 仲正

あやめ草ひくくもたれありくもて々くをこのはをふくこもりん

詞 世沢のあふ池めまこてひく。めまこふるて行。ふかた兵法ふかりそもて引

詩 菖蒲五字對句

揮鎌若轉月 緑成玉床蒲

拂水生連珠 頒兼清夜娯

永根 哥 あやめ成永根 永歳六年

五月五日ふあやめの根合とうあしとあしとう著問集に出さう

(季)夫長さ五のそれぞれ五ひろ九尺々へやまあらのひとうるうん 後頼

菖蒲髪 聖武帝の時に初る 続日本紀に出さう

菖蒲案 菖蒲生絹をもて黒米の案にて奉ることあり

菖蒲枕 (季)夫木 後頼

あやめのはゝ〜かくしきそれをくまとやよいのみ〜ゝさ

菖蒲帷子 菖蒲浴衣 明応二 京和

(俳)彩のはまも上衣とまゝ手〜ゝ

菖蒲帯 菖蒲帷を

棟佩 (俳)とうて帯物とすること悪氣と辟るゝと證類本艸に出つ俗云

せんぐんの木とゝふるのたう

(俳)樗佩てけぶとしやゝ 志ハ有嵐雪

菖蒲酒 石菖を切て酒に浸し

黄を少〜ぐらうへてまをく

よ〜一切の邪氣をさる (俳)

盃中蛇影の下なる

菖蒲酒 家定

蘭湯 蘭を

湯に入てゆあみすること

大戴礼に見へたり

菖蒲湯 百頭の菖蒲に方病を

治するふうう蘭湯を

どの故事とうおこるべし

(俳)湯ゆでも公ゆるゝ菖蒲北道

菖蒲刀 菖蒲と

ゝうてかざる今木

刀のうさぎ 菖蒲づくり

(俳)を刀見へのやうにさ手く 移竹

菖蒲曽 削懸の甲

是も菖蒲を飾

幟 飾甲○此日幟甲一かゞるゝ

事ハ光仁帝の時蒙古の

賊来る早良親王討手として出陣あり親王伏見みぢの森社に祈る時ふ五月五日忽ち風吹て戦ひましく勝事を得より此例ふよるものなり唐ふも今日武事であるなし戦をとるをと事類書纂要に此をのせ自然に此月武備であるきしと和漢符合せしなるべし

(俳)痘瘡の跡どころかは幟の冬　其角

〽女ねはひめでゝくいわうかな　許人

〽似様かはなお作向ての幟かれ　移竹

(狂)忍ぶとれて源氏かや ふるあの先ふ網もよとてろ紙の幟りかる　紅雪

印地打

童の小弓を持て戯とる事騎射の如ころく印地ともいふ印地とはいふての跡の際付て印ちくるふよりて名付るべし

(俳)ゑよ人よむくり衣地のきつふて　蕨雪

〽庭出てなも吹たり印地打　移竹

藥日

附(お)　新撰六帖　貫之

時もあらくなさくにすむすかや先達に見そもとり日は尤とかしける

○今日を薬日といふは薬草を取或は丸散と調合をなすよしされも今日制をなすべき薬を記す

紫金錠

諸毒を解し腫物を消し毒虫をさする神方なり

五倍子　卅目　大戟　十五　續髄子　十匁

麝香　五匁　右細末して丸など其外蘇心丹固本丹延齢丹反魂丹等をさて今日調合をなすとなす

或ハ神麴今日製をなすに明日もよし

薬玉

(お)　夫木　中宮上総

わくふをくとりれたらあるをなへれくすりの玉とぬるそとあるる

○今日薬草を五色の糸にてつくりて臂ふかくればあし悪気を拂ひとそや寄まそおこうしあやめくを

ちくり提礼今日菖蒲を用て整長命縷續命縷辟兵縷風俗通に條達記

皆菜玉の事なり五月五日ちくりへと

附 菜玉とは何ぞ麻なるあの神 正立

詩 續命縷之詞　萬楚

西施謾道浣春紗　西施は呉美人なり

浣紗石は碧玉今時闘麗華故事なり

碧玉を春秋の時の美婦人眉黛器量ヲクラベアラソフ

奪將萱艸色　ヤユスミノこんとりナルハ草ノ碧ナル

ヨリハ色紅裙妬殺石榴花

ウルハシ

モスソノ紅イナルハ花ノウルハシク見事ナルヲ子タムバカリナリ

新歌一曲令人豔　唱ヲウタヘバメツラシク人々ノ心モ

ウキタツバカリナリ

醉舞雙眸斂鬢斜　酒ニ醉テ舞ノ袖ヲカヘシ目モトニ風情ヲフクミタリ

誰道五絲能續命　誰カイフヲムカシカラ五絲續命ノ故事ヲイヒツタヘレド正コノ妓ヲヲ見テ却令今日少君家　其美麗ニタヘシ

イヲ失ヒ死セント思フバカリナリ

藥草摘　今日收採をは

ちくりに艾を取て製

競渡　是も百草を採む事を或は競

駈競　狩　菜擣　云

(方)万葉　杜若ちくりつ老はしぬ

ちくりひぐらすする

月ふるとをり

闘百草　色

の草とを合せて勝負を爭ふ

つまくれ　荆楚歲時記に出

神水　今日午の時雨ふる急

小竹を切べし　竿は中に

ちくりの神水あり是をのめば百病を治し或は丸薬を製すべし

五月鏡　(方)玉葉　為家

みくるとをにの

浴のますゑ[illegible]百練鑑　今日午の時楊子江まで銅を二百[illegible]て明鏡を鑄[illegible]こと事文類聚に出づ是を以て本朝哥ふも詠すると

粽　異名　角黍　雄粽　秤錘粽　九子粽　角粽　蘆粽　笹粽　餡粽　餡粽　菰粽　[illegible]粽伊勢物語に出

粽飾之圖

粽ハ千巻

柏餅　むしのかちの葉に[illegible]ほかめり拍も神道

小用ゆるめでそたりのうれべ[illegible]ゆるなる屋しもべ[illegible]

今日のかざりの毒邪を拂人ためく夏ハ毒虫多く人の家ふも入り来るにより粽ハ蛇の形ふ表を是を食すをハ彼を降伏をる心にて夏の中ひざ[illegible]るき事と表して説をうべ

朋　[illegible]女ハ粽[illegible]　是賢[illegible]

注　[illegible]ふ[illegible]れよ[illegible]命の数も八[illegible]粽をば　行安

詩　粽之詞　唐煩之

南薰應律轉宋旗　五月八午属ル南方ヲ主ル色赤シ　火帝楽離錦席披　夏ハ火應レテ神ニ火帝ニ[illegible]易ニテハ離ノ卦ニアタリテクワ楽ニ座席ヲカザル　榴吐千花兼羽蓋　ザクロノ花ノ紅キヌガサニ映メ美シ　黄開五葉攤

瑶堺　堯ノ時蓂莢アリ一ト月ニ一葉ヲヒラク灵草ナリ　瑶堺ハタマレクニワ禁裏ノ御庭ナリ

承盤錯出

仙人掌　天ノ甘露ヲ承盛ル器ヘノ制仙人ノ像ヲツクリ手中ヘツユヲウケルヤウニコレヲヘタリ

金縷逆分

織女絲　故事ヲ用ヒタリ

復道龍舟

方競渡　此日蛟竜舟ヲサヘギリレ古事アリ

術息更許向昆池　天子ノ恩惠ノ詔命ヲ受テ御池ニ舟ヲ浮ヘルコヲ勅許セラルヽナリ

蛟食芳辰　屈原今日汨羅ニ没シ後人これを祭る其祭供を蛟龍のたゝかひとる夢よりこれをはぶく五色の糸を以て粽よりはくこそあらんよといひるとくこれ角粽の始めと委しく本篇博物全ニ見へたり

射粉團　粉團白團唐の世ニ宮中ニて團子と云ふ金盤の中ニ置テ矢ヲ射て是を射ぬき食ふる事天寶遺事ニあり

退水神　唐士彬秋氏ニ子海ふ沉ミ其妻水神とうりて人を害ます故ニ五色の糸ヲ以て海ニ入れば則ち五色の蛇となるあへ水神おそれて人を害やまず

桃印符　篆字ヲ書て符ニ畫そうふ凡帳ニかけ置て悪氣ヲはらふ術

赤霊符　今日ふる事ヲ記ス

呪人　唐士彬言曰ふ丈人形ヲ虎の形ヲなすふ門戸のうへかけ蒲人ヲもいふ

戴艾虎 唐土ハ艾ふを虎を作て黒豆をとるる小虎を色々に糸を作り文の葉ふつけ頭ふいさぎきて邪氣をさけ福を幸を

画天師 張天師の像を画かきて又五色を作て五文を画ひんなりと拳ゝ門戸ふかざる毒氣をさけるとつふ本朝元三大師の御影とする也

去鴆鴆舌 零陵記ニ鴆鴆一飼ハ五月五日ふ其舌の尖を去れば毒物いひ声もきやうるるとし鸚鵡ニ遷り

鼠ヶ糞 酸きや粽てたくめえの尾潮けりのあるうめと百官ふ賜へるし漢書ふ出り

競渡 駕車永馬 屈原流維ふ

心ゝそ今日競渡のたりゝをとるを船のおろく早ゝを水馬ともいふり越人船を車といふ福を馬といふ

(秋) 賀端午文 左右天蔵卿蔵文ゝ

端午之日祝賀

午一日ノ祝規

同日賀 左右馬寮 仍為 進ヲ獻 賞ニ 更ニ

飛龍 未 帳ニ 一ニ 不顧 和胸 薄 締

粽 一折 毎例ニ 画 彼 楚粽 進テ 御ニ 以テ

ゝ 俗ハ 生 久ゝ 知 納 敢テ 献ス 献ス 奏テ 而

心 奉 ハ ゝ ゝ ゝ ゝ 蠱 之ヲ 蠱 蠱

尺牘　上中下昏暮

午日祝規　中　天中佳節　上　端午之定秩　下　五綵糸節　浴蘭節正届

退歓賞　上　多寿方福　中　寿詞何盡　更欣躍　下　多快欣々多々

更不顧不腆　上　不憚軽儀　中　不羞菲薄　下　無論鄙品

薄締　軽帷單衣　楚粽　角粽　黍粽　菰葉粽　例　上　謹因舊規以奉献　中　逐儀例献納　下　菲儀以投

希笑　冀笑存鑒我荷　曝　惟鑒納為幸　上　請願留

状　同報答　左りハ尺牘漢文ヨリ

清飲試史端午之為佳節　辱使傳蒲節之詩辰

足事之出者一杯共賞　送鮮美嘉魚

結搖衣堯人祝多慈之錦　堯莊叢偶人與堅童

仕い移給き新々礼ヲ述ム　拜謝期多日

尺牘　上中下昏暮

辱使　来使傳命　中　勞貴介　蒙使命　上　恭承顧命　傳蒲節　上　賀端陽之辰　中　祝

綵縷佳節㊦告令辰送鮮美㊤錦鱗下賜㊥珍魚芳惠㊦惠嘉魚錦兜莊麗㊤王飾奇偶㊥綺羅金人與豎童附小子○授豚児蒙箇厚貺辱賜數品更授多儀吻蒙分惠拜謝々對使拜喜相逢以謝之拜受無顔暫待異日

妙治眼病　絳の袋に栢櫛の花を盛て今日眼を洗ひそのまゝ是を棄るとてしゝみ沙我病を代まとゝ唱べし治をる事妙なりと養生雜記にあるとり

治淋病　菖蒲根を取細末してたしなゝ置阿膠と等分合して用ゐる三度用ひて治をゞ

治久痢病痢病　今日へびいちごを取朝露にあて置一ツ水にて呑べあの年痢病いろ〳〵流行てもうつらぬと妙〳〵

衣服虫なくする法　今日菖の葉をとりて櫃箱の中に入置べしのづゝ虫を生ざるなり

蠅のいろさる呪　白紙のてうり蠅どのをさるさるかゝてをうこそをれといへ此哥を三返唱へ白の字を四方の柱に逆さまに張り又岡といふ字を棟にそも天井にそも真中にも貼但しいづれも文字をかく紙一寸四方真四角に切てかくべし今日午の刻に此法の如くかゝてもせば其年中家内ふ蠅いらず

蜂を採術　今日午の刻石菖を採て晒し乾し末と

今日鯉の枕骨を黒焼にしたゝるを置くべし久しく止りもしをる

痢病よわくて其効神のごとし

蔀の下ハ放置けバ蛍長くさるゝず

蚊を辟る咒 今日午刻儀方の二字を書て家内の柱ゑはりつくるどれ粘れバ蚊をさる又酒を篠の葉にそゝぎて座の四方の隅ふ掃せバ蚊さる其篠ふすかりとあるべ

又法 今日午刻燈心を油の内へ浸し日輪ふむかひて天上の金雞蚊子脳髄の液を喫とく右の咒文そと返唱へ念し終りて太陽の氣を吸ひて燈心の上ふ息を吹き夜分この燈心ふ火をと点されバ蚊とくさ去る

又法 今日浮萍をとり陰乾ふして細末し樟脳を加へて拌せ弾子の大さふ丸して毎晩の蚊多り火として焚バ家内の蚊とくゝ水となる

物覚よき人ふ物忘れさせぬ法 今日鼈の爪を衣服の領の中ふ入置バ物忘しやむ

夫婦中悪きを和順ふする術 今日鳴鳩の足の骨をとりて絳の袋ふ入男ハ左の手女ハ右の手ふかけ置べし又常々衿ふ入おくべしは

京 賀茂競馬 今き?ひ馬。赤方黒方とて左右ふつがひて馬ふくらべをるなり

(俳) けいばかるんやあかい鳴る上賀茂

(狂) 一つさうふかいおなりくらべるきつくさしおも皆合法之　貞柳

△藤の森祭。けい馬あり此祭の古実ハ識甲の下ふ記と

大坂 △生玉や太三馬 ○天王寺太子堂法事 巳の刻音楽

大和 天神祭

近江 関明神祭 ○三井寺南院祭 神輿出御 ○大津高山寺貴船祭

六日 六日菖蒲

(家) いふぜん今ハ六日のあやめ草むくゝ人もうれぬ我方ぞあり　天木 武臣内大臣

(俳) 六日ふハ花の誌ふ入菖蒲かな　悟丈

七日 京 今宮祭 御出

八日 山城 宇治祭り

中申日 陸奥 相馬中村野寺 妙現大祭

十三日 不成就日

栽竹 龍生の節 又竹の節日とも 竹迷日とも 今日竹を移し植えば能活て繁茂すと

俳 雨をや竹に碎く一日の人家 其角

播磨 室明神祭

十五日 京 今宮祭 茶野さて

是と執行と下松と云所御旅所へ昔八九日ふ有り

江戸 目黒不動地主早尾大権現神事

和泉 堺天神祭

京 永観堂大般若轉讀 ○白萬遍念珠出る

大坂 天王寺大般若午刻

丹後 九世戸の十七日 龍燈 正五九月

大坂 天王寺金堂 本尊秘法 午刻

十八日 京 今宮御輿洗○

上御霊 廿一日 不成就日

廿二日 大坂 天王寺大般若

子堂法事 廿三日

京 清水田村 管忌

近音楽午刻

江 坂本丙 廿五日 社祭

有馬日 村上天皇の御國忌に依て今日禁裏ふ政事なし然れ共急用あれば行

江戸 揚弓結 廿八日 界惣會

虎有益と云

涙雨 今日曽我祐成討死する日なり其妻虎悲傷せしゆへ今日うつ雨を虎が涙と云

俳 山中ふへぞやいある虎が雨 秋竹

狂 秋水の別をとゞめこと尼ふるる日なれ虎ハ色をもれわれ身 未得

京 下京中道寺祭 ○新住吉祭

江戸 芝居曽我祭 江戸初芝居はじめて曽我物語をするゆへ此報恩に今日法

樂の哥舞妓をとゝのへ○白銀
鷺社森神明祭○目黒不動
參○藥研堀不動參

大坂

住吉御田植今日堺

乳守の遊女御田をうゑる事む
かし宮女惡瘡の愁ありて宮中
を出て乳守ゝさゝ〻ゝ此病を住
吉の神ゝいのゝあるあらゝさ神詫
して諸人を面をとゝしいやゝさえ
ゝなるすべゝとへよりて吉月の
女ゝまゝゝゝ田をうへるふ惡
瘡たちまちいゝゝこの例を以
てそれゝ乳守の遊女も田植女
としるのゝとゝめゝゝゝゝ

(宮)天王社吉社苗　家隆

ふ苗とるみゝゝのうへめもいろ
神をゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

(排)々ゝ風ゝ田ゝのゝゝ神ゝ采山
神ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ芦桂
ゝゝ女ゝゝゝゝ神ゝゝゝゝゝゝ

伊勢

山田御田扇。宮司ゝ扇を出てまゝゝ事ゝ
常の扇ゝゝゝゝ少ゝ大きゝ内宮の
扇ゝ骨七本外宮の扇の骨ゝ六
本檜ゝてつゝる松の画ゝゝゝゝ惡
比須の朔とつゝゝ上ゝゝ墨繪の板
行ある厳々ゝゝ物ゝ社人あ
ゝゝ此扇を持て舞ゝゝゝゝゝ
御師ゝゝ遠近の諸旦家へ送
らる恒例ありゝこのゝゝゝの風ゝ
あゝゝゝゝ邪氣を除ゝ田圃を作
る者ゝ能みゝゝて凶年ゝゝゝゝゝゝ

晦日

京

祇園神輿洗。こゝひゝ
こゝ一基四条宮川のゝゝ
ゝゝゝゝゝ水ゝゝゝゝゝゝ是ゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝの役者おのゝ家々の挑灯を
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝ奥ある見物ゝ
てゝゝゝゝゝゝゝゝ

和泉

堺方違明神祭

月令

此部まハ五月一ヶ月日の定まりごとなる事をあらす

最勝講 東大寺。奥福寺。延暦寺。園城寺の僧を講師として清涼殿ふ講ぜらるる

内大臣

㊀年中行司

百姓や五月の田植をいとなむ

いのるいのりも家君のまもり

つまく草ふ御講の**賑給**是

爐とあるも此事く

そもそも民ふ米塩など給ふ事く

㊀年中行司　嗣長朝臣

所あれい民の妻子をもりしさと

ゆくゆくの家を君やくらん

富士垢離 来月上旬ふ七月ふ至りて

登山を尤百日浴水潔斎をなす

但し江州の人い七日精進して登る

伊勢 内宮外宮御田植ハさ

たまりなる大神平ふ

て長官車をいだし

規式をなる多し

瀑布

△生布　△半さし　△木平（夏の部ふ）

△麻布　○布さし　といへハ麥ふ

ゆ〜ゆ雑ゑ布とも云ふも雑ゑ

㊀大木　仲正

むらのの畑のかたらの卯ひ花

結ゆ〜ゆるる作り乃布

晒賣 打多ノ曝布麥風土

半夏生 五月中ふ十一日めるり此ふ

半夏生ぞるを以へ農家

ハ日の前後と考へて物ど蒔ゑり

大原ど 丹波國大原の社へ

桑詣をるを云三月九

三日桑詣をるを春さ〜と云九月

九三日桑詣をるを秋さ〜と云

絺 薄物　單物

ちゝら花 古代帷子

の染色といふ寛正六年慈照院殿大追物御見物の時射手の装束ゆゑ花の白帷子を着るゆゑ是を以て考ふに染色も定色其外沈色

狂　恋をしてふるの帷子のひとへ　久清

俳　半もまく蘭の咲やつゆ霜白枝　羽織

俳　のぼりうり風をあるすやゆ羽織　玉芝

月ふるむ一さは濃も浮世外其角

時令

此部まい五月の時候をかかる事をあつむ

さつきあめ　梅雨　黄梅雨　黴雨

五月雨

さつきあめ

クダルの暑をりゝさつき雨ゆゑ

とそれやらあるのかり川

（古）新古今　藤原定家朝臣

玉葉の五月のうつあつを

人のてゝ五月雨の

家集　河五月雨　信実

五月雨ふつそうら川をたゝ

あるうやいつこせくのむりまを

家集　山家五月雨　雅有

あびさゝを形の行竹枝ゆへて

いとゝせあををあれ五月雨

続古　海辺五月雨　家隆

水くふ塩汲ゆむ海士人の

神やれうんさみくまれ

千載　仲綱

ちみくれいゝ雨の末に秋あまて

あふ塩こけ乃波の浮ゆや

御集　江五月雨　後九条内大臣

五月雨も久くあるゆ花の江の

ゆきあひのそのひまやふるん

夫木　五月雨有餘　右衛門

五月雨のもゝきゝつきれ

たまれあるゝ

（詞）日数ふる。もゝ人雨日。をゝみ。

雲ゝゝ。月の行衆もゝ。

海ゝ。形ゝ。松ゝ。

ぬゝ川の数ゝ人。雲ゝ。

つるがさねの衣の袖の雨もしとゝ
なく〳〵わするれ。五月雨そゝぐ。五月の
糸。同じ人のそゝぐまゝ。うらまめ
る。五月雨は人もこひこぬ。

(連) 五月雨に月ねの水は淀乃高　宗春
五月雨になみだの河ぞ追ゐる　紹巴

(俳) 五月雨や名もなき川のおそろしき　貞佐
三絃や寐まではふるむ五月雨　其角

(狂) 五月雨ふ降てぬれてぬれがへり
からくその物ひとたるる　満水

五月闇（さつきやみ）

(俳) 竹原や新の去
ふみ入てさつき闇　我白

(詩) 五月闇五字對句　同上

海霧連南極　蓮渚千峰靜
江雲暗北津　梅天一雨清

(詩) 五月闇七字對句　詩礎

帆開青草湖中去　夏亦寒
衣潤黄梅雨裏行　連雨来
鸞風乱點芙蓉水　五月寒
蠻雨斜侵薜荔墻　已生霓

白はへ

つゆ晴るころ小雨降ながらも晴んとする近き有と云

黒はへ

空かきくもりて今も降出さん
きの内より晴る迄を有と云

草木

此部より五月一ヶ月のくさ木の類とこゝにあつむ

樗花（あふちの花）

雲見艸。苦楝○俗云
楝欓之正字楝なり

(哥) 新古今
あふち咲そともの木陰露おちて
五月雨はるゝ風わたるなり　忠良

夫木
かやりたつ庭のあふちもちりはてゝ
あやめの軒をすゝむ夕せ　家隆

詞　かやうしてとなり。家の外西ふかるとよし。紫雲ふまじん。吹風ふかる。ふるさのあふちうれてあつ。ふる上。小雨。洞雲。夕日新。雲れ。雲ふるやー。加茂。小雨。

連　橘ふも花ふ雲ふるあふちふ家春　あふち咲ふの情やもちの祝　紀巴

山梔子花

木丹　梔桃

詞　いとあふ。ふくえいこ。ふふう。

連　ふちふのふいふのある世ふ　新撰筑波

俳　ふちふいふふいれふとう　元隣

狂　はくくしんそうまあおふや　ふちふふの漆飯　光廣卿

石榴花

古来

石榴三種あり。本紅千葉。白千葉。黄色千葉なり。近世桃色あり。かりて珍らしく愛ふべし。

参　新撰六帖

吳引の山杭榴咲や軍越ー。

若ふ川若ふいふひ待ふを

俳　実花いふ女や子柔の花ふ榴賀

詩　柘榴五字對句　同上

詩　柘榴七字對句　詩礎

新枝合淺緑　露色珠簾映

脫萼散輕紅　香風粉壁遮

風枝舞腰香不盡　不及春

露銷粧臉淚初乾　落絳英

眉黛棄將萱艸色　度隙風

紅裙妬殺石榴花　春閨空

詩　柘榴之詞　白樂天

暉々復煌々花中無此芳

ソコラキラくト見コト二サ夕此花二

カヤウナケンキハ思イガケナキコトヤウニオモワルヘトナリ　艶妖宜小院修短

稱低廉　ミウラナ花　イロハコサンシキニヨクウツルナガエダモミ

イエダモヒクイカヱニトリアヒヨクサイテアル

女貞　○貞木　鼠ノ子ノ花　五月細白花開く葉ハ椿ニ似てきざミ故ニ姫つゞき又ハ女やぶ椿と云　夢ノ花　朔草

黐樹　四五月の頃白花を開く葉ハ女貞ニ似てうるをく光あり　四時凋ます冬ハ二三分落葉ス　三才図会　此木の皮と取てひこ[illegible]

㊂大木　果ちもむ高の好落ノ子ちの樹ノかをしゆるこいからたなる

南天花　南天燭　南燭　男精　染萩　楊烟　牛筋

栗花　花青黄　㊁　照んそ　蓑　扇竹

合歡花　合昏　夜合　青裳　萌葛

○花上ハ半白く下半紅なり葉ハ緑ニて夜ハ合す　稱ノ子の如きハ子の木の中器なり

○人家ふうハて人をして怒らさらしむ合歡ハ怒りを除き萱州ハ愁を忘るといへり　○黒丸子の主菜なり　㊂万葉　紀女郎

ひろいさたるいとひろ稱ノ忘

君のゝみんやうけさんふうん

負蓑二年百首　爲家

辟盗賊法　戸の尻さし木に栗を用ゆハ盗賊入らず

杜鵑花　さつき　種類ハ多くハ色其中八木ハ賞する

○松ハ多くハ白。さつま紅。ハ心の雪。神楽岡。小つゝ花。かゝ多。人丸等へ

△五月躑躅　ともかく今ハ多くハ

ばかりなり　一名　石巖花　花ハ出ス

秋といへるうれひあるに秋の秋の
神〜まつりはくれをる月う郭

(能)祝の神用ひら　今の世
五月五日の神の元治德　榊花　今の世小用ゆる
さうれよい花うーもうも咲木い
色々説あり○二才圖會ふい榊を
坂樹とかく花い白く少さき
実とむもふ生い青く熟をれ紅　百合
強瞿。重箱　(夫)夫木　西行
玉云雀上るあ〜田ゆまる姫ゆの
伊のつくもるさ我ゆうさ
(詞)夏の野。庭の面。おけうふ
さけう。あ〜田ゆあうる
(連)ほ〜かくはもうさと花はさゆ孫宿

車百合　車の輪のごとく花ひ
らまれかう横小垂
日光の産い黄いろ　姫百
大峯より出るもの歌

合

山丹。百合う似て
花も葉も小ー

薬へ柳小似ようう花赤〜

(夫)夫木　土御門院
庭の面ハ土さくる芝ハ日ゆ
ひう〜あるきれ姫百合乃花
(連)ちうて乃ゆ姫百合ハ三ゆ宗牧
(狂)深草小咲まどうる姫ひうい
小ゆ〜小町の花
よでおうう　花楽

兒山丹
開花小さく愛を
べ〜江戸より出ず

唐山丹
赤花び〜厚〜薄
さうのと緋百合〜云

袂山丹
白く艶厚く本琉球ようう来
る深山の間繩ふそがりて是を
取得て袂ゆ入まて
帰る依て此名あり

鬼百合
巻丹。花赤く六弁く
黒点あり山丹ようう大さく
(狂)清勾そちふ人真ひうやうぞひん
秀ふかさうう鬼百合の花　教二

(俳) 鬼ゆりの名も忘るゝ色香かな 蕭

△糸百合 (狂) 杜撰ゆりつて舌をふりたしみふらぬかそつく巻かしいて

ゆり露玉○百合 山丹 巻丹は一類三種あり此種数品ありて透明百合。博多百合。黒百合。紅葉百合 紅百合其外擧てかぞへがたし

△紫陽花 一名△四ひらの花○花葉ともまてありれ似たり唐の白楽天初て紫陽と名づくと云

(哥) 夫木 公朝
花極と人は去り川かみの さらにつくさする あぢさゐの花

(詞) よひらの花。八重咲く

(俳) 紫陽花やそこそこゆるや草枕 嵐雪

△紅花 紅藍花 黄藍 呉藍 くれなゐての暑言あり△末摘花 このむるなれつむよりゆへ小名はく○漢張騫ろとめて種を天竺より得て帰る本朝へ傳るは呉より種を得たり○中九日種をまき世ばよく茂盛をとれり 羽州最上もくらは山形の産を良とを伊賀筑後これにつぐ豫州今治并び摂州播磨と其次とす

(哥) 新撰六帖 為家
紅の末さくとる乃色勝らく うつるみもつをさせをぞ

(連) ちからをと末つむの世なけなか 宗祇

(俳) 雉嫁ぞ畑に笑良紅の花 連衆

△天門冬花 一名くさすぎかづら。萬年松。金花。商棘。海濱に生ずる物 葉は杉の如く細らかなり

(俳) 天門冬うききせさ枚のもかくさ 小春

△蜀葵 花五六十種あり色数品花形千瓣○五月下旬花咲下より上へ咲のぼり開き盡る時を梅雨の終りとす大底ちがはず

錦

葵　花の大さ銭の大さ位〻〻白赤二種あり開ること久し

龍葵　葉のつひ小似たり　実は茄子に似たり其始青く熟する時黑く或は熟して赤き物を龍珠と云

萱艸花

忘憂　鹿鈴　黄赤百合に似たり　住吉の景物なり　夫木　為相

下紐はとけそめにけるあやめ草　こころふかくもこれ人の恨かな

俳　忘草は花の異名なり　萱艸の花と見や　萱草　苦の来山

詩　萱艸之詞　唐　李咸用

芳艸比君子　詩経ニ見ヘタリ　詩人情有由　是ハヨシアルコヽロ　低應憐雅態　未必解忘憂　花葉ノ風流温雅ナルヲ愛シテ憂ヲ忘ルヽト云コトハ解スルニハオヨバヌゴ

積雨荻庭小　微風鮮砌柔　雨ツヽキニテ荻草テコケモ砌ニ柔ナリ

莫言開太晩　猶勝菊花秋　花ノ晩キヲ咎メ玉ノ菊花ハ秋ノ末ニヒラクソレカラ見レバ早シトナリ

下毛花　繡線菊　ぶんごうの葉に似て小さ花をびっしり淡赤色あり

金蓋草　花黄白色もあり

金銭花　花紅みごとし

金銀　花

忍冬の花と黄白交咲く故の名つく

俳　金銀たちばあくたふるし地うる利貞

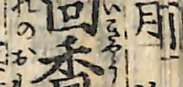
夏菊　種類中邊異名秋菊の一所ふあり

連　夏菊は食いさ葉の移　宗節

茴香　色薄黄

花日の内いろ〳〵かゝる是ふしぎて時計の名あり

時計草



威靈仙　花淡紫

鼠李　鳥巣子　牛李

美容柳　金絲桃　末央柳

花黄さう

治積痞法

九州　大祿の諸士平素積を憂ふ人死ふ至り其子ふ遺ぎやしして死せば腹をさき積を見て何もの相てさする是を見よ〳〵命を子遺命をたゝ〳〵上ゑ詩へ腹をさく果〳〵て積堰あり甚ざかゝ〳〵利刀をもつて刺〳〵あるゝ種種の菜物を以てたゝげ共ゝを変せを其中一人楊枝をもつて仮初にさす其ゝ日たゝちふとゝる是びゝ柳をそ作る楊枝と故ゑ右柳の葉を煎じてそゝぐ〳〵ゝ其積堰たゝちまち消滅と云り

酸漿草花　一名酸母。片葉三ツある故かゝぐゝ

蛇牀子　異名　墻靡。蛇末。蘗。地牀。馬牀。花白く横さゝ〳〵蛇喜んで此草の下ゑ卧し其実を食ふゆへゑ名つゝ

蕺菜花　異名　菹菜。魚腥草　花四葉にて白葉腥

草石蠶　異名　甘露子。土蛹。滴露。地瓜児。五月根を堀て蒸〳〵煮て食ふ味百合のゝ〳〵根老蠶のゝ故名ゝ

萩藝花　玄びつい。風ゝ。本草綱目云其ゝ莖蔓似て強く刺あり葉馬の蹄のゝ〳〵して光沢あり秋黄ゝる花をひ〳〵くゝといろ〳〵。俳僧の季ゝゝ古来ゝ夏〳〵する故爰ゝ出す

天南星花　一名虎掌。和名ほそみ

苔花　一名地衣草。淋雨の時花の形のごとく物を生ず是を苔の花とつゝみ

種類　○石蕊かこら花ちぐのごと

○井中苔ふるき井の中に生ず

○垣衣　これ垣の北陰に生ずるものゝ

昔邪と名づく一名烏韭又屋上に生ずる者を屋遊又瓦松一名昨巢何草こいの○玉柏石に生ずかこら松の

朝菊　四月五月

ぢく〳〵紫色なり

の内紫碧色の花をひらく〻朝開き暮に萎む故に名づく

蛺豆引　一名胡豆○胡戒又翡翠

○花の形蛾の

蠶豆引　其莢上に向ふ故に名づく

花見　蔵のごとく花さく

○石蕊　ちくさのもの事ども

花菖蒲　花葉かきつばたに似て紫白飛入種々あり

菖蒲　軒にふくるものは泥菖蒲なり石菖蒲は小葉なり盆中にうゑて愛す

○年中行事

経賢僧都　みそぎのまつりのこと　おなじ茶

むつのつくもか　○川らん

家集　雨中菖蒲　法性寺入道

雨まいをとゝのうるあやめぐさ

ふかき茶をとるおれぬるよ

泉川殿　蓬菖蒲

ふりのゝ杉はたのゝあやめぐさ

椎言

あやめもわかぬみだれ屋のれ

草庵 水辺菖蒲　頓阿

きてみれはかやか軒のあやめひきて
おやそえてさけるあやの池かな　献す

○江帥菖蒲を献ぜらる
進上水邊菖蒲
千年五月五日大江[illegible]武
師頼卿へ
皆人まで得がたしと師頼卿より
まれなることぞ

㊂沢ある池のあやめに風かほる。みどりすゞしくさかりあふぐそ
千とせ草のなかくしおやかの根をきえ根をおもふそへ郷のあやめの根にあらはれて鳴。豆沢

△菖蒲つくる○日ろうるのて　九寸以かおり
小豆　益田池　豊後　深川　豊前

㊄かゝり枕にはけふ白あやめかな　牡丹花
人まくらに家もあやめかな　紹巴

㊅座敷もあやめはるあやめかな十
いへもあやめ幟もかゝる嵐かな　其角

㊁皆人のこゝろにとほしはの花あやめ
ほとゝ沢辺の水にさしかれける　常楽 春

雪下（ゆきのした）
ますかさ

虎耳草（こじさう）。石荷（せきか）
葉（かう）　夏花有季冬

△朝露草（てうろさう）
て白青うろこあり
銀銭花。そるは楮に似
底黒紅のことにあり葉三出五出
あり西瓜の葉に似たり高さ
二尺えたり枝あり朝は
ひらきゆふべは萎むなり

長根草（つくもぐさ）
江蒲草。石龍芻（せきりうすう）。
○すぐに生じ未れ

△蚊帳鈎草（かやつりぐさ）　莎草
小花さく
穂のごとし

玄及（さねかづら）

五味子○花黄
白紀州の産よし

木の類なりかたちの葉に似て其
そこ三うどあり花薄あかし

△萍花（うきくさのはな）
㊇萍出るは春なり
夫木
為家

又さゝくれたやさゝ多ん立浮ノ乃
ゆ[illegible]ゆ出多中川のあ

俳　うた麦や苔さい
あちれ家ゑ咲こ由　藻の花　馬藻

水蘊　△藻とゆ△藻川舟　貫之

歌　夫木
いつかも今日と言るそ思ふ
あるれてまゝ主とうう

連　[illegible]
俳　池をとゝ山風あもれむ竪　嵐雪

[illegible]

鉄線花

二月苗宿根より生ず
四五月花咲くあり
[illegible]故名づく

詩　鉄線花之詞　貫昌期

披雲似有凌雲志　サキ出タル
ケンキ出世
ノ志アルヤウニ
見ヘルゾ
向日寧無捧日
心　日ニムカイテ花ノツカヘ
ウヤマフテノ心アラウ　珍重青

松好依托　ツルクサナレハヒトリノ
ルヲアタワズ松ノ木ニイ
カヽリ
直從平地起千尋雲
タルフ
シノヲ出世ノコヽロサシヲトゲ
テ松ニヨリテ高ノボリヱタヅ

撫子

△瞿麥。蕖麥。
。南天竺草。天菊
。大蘭。巨句麥。洛陽花。よるゝ
。[illegible]中△石竹△常夏△[illegible]此三
品ハ同種ヘ今分ケテ二種ヘ千花
びゝの色ゞきざみ有て切ヘ
ある物をみでゝこゝ切ヘ
まるものを石竹と名づくヘ
○葉ハ用る瞿麥△かゝるみでて
或ハのぞれちくとゝ物のヘ花色
薄紅ヘ△倭撫子葉ハ
かく花紅紫白單葉千葉數種
あり△藤撫子葉ふゝく葉ハ
ヘれちゝヘ白桔梗ハ似て白
紫と帯ヘ○阿蘭陀石竹葉株
ふゝく葉こゝく花も又ヒゞんて

大輪なり○京撫子株ふとく葉もとより大きく花一重紅なり其外数十品あり

㊐家集　俊頼

君が代のたねまいらん春日野は
いつれ所にも花さかりけり

久安百首　俊成

色の面は春地の上のかすみき
ちとひとしけるところのはな

拾玉　久愛瞿麥　慈鎮

ふるさとにかれぬるとふ瞿麥の
名のみなつかしうちとけはば

家集　瞿麥夾水　仲正

見渡せば水こそ中にれて
ふとうふ咲大和なでしこ

家集　瞿麥滿庭　清輔

色の面はうつ撫子のりそれなれは
ふるさとにふるはるの

夫木　夜思撫子

白くさの夏のはなかとわうふるさと
かつるてしこはなやなれ

詞　咲旬。ちるさま。かり絆。ちろく。
はなれ。垣根。日ゆ色。ちるさま。
ちぢみ。笑まとる。蕊の床しいみうちり
とよむべし。ちりおそふ。
よむ色し。妹はいもく我ものこと
こころのもとよろう。紅も
かつれる井。日ゆしのく。
大和なでしこ。なでしこ。
なでしこは。ちいさくして。
しこ。おはしつこの
ものと。霧。
大和撫子。かつ撫子。
先より。
なでしこと。
なでしこ。ふしぐなでしこ。

連　撫子は名良清　知恵　宗祇
ちいさつかもくそ旬人ゆ　昌休

俳　撫子やちいさいものけさとよ　白之
なでしこや時のわ紙起あつう　長水
いもうとて床をうき　西鶴　白火

(狂)かとうそ四人おゝ〜ハ孔ゆ人の
あ〜ら〜人よるゞ　このうる行風
神ふ之り衣見ゝてやうゞ　この
鼻〜ふ〜くとんゆる孔はゆ　仝

(詩)瞿麥之詞　唐　司空曙

一自幽山別相逢此寺中
〜へカタ幽山ニテ見テカラ〜タ　高低
此寺デオホクノ花ヲ見ルヴ
俱出巢深淺不分叢　イツモ
オナレコト
野蝶難爭白庭榴暗讓
紅　白キ花紅ノ花外ノモノ　誰憐芳
紅ガ及バヌ見ゴトナヴ
草色春露到秋風　花ノウツクシ
レキヲ賞スルコトバナリ

田植　早苗取。苗の長サ七八
すの時うゝ植ることゝ又
早苗ゝるゝもゝ〜〜
(俳)合羽着て女ゝるゝき男ゝ其角

早乙女　女の苗植ゝ云(俳)乙女
のよこれゝ新ゝ狐少其角

田歌　苗ゝるゝ時声とあげ歌(連)声の色も若苗ゝゝ田ゝ柏
摘ゝ比ゝ里九門ゝ人田ゝ多ゝ　紹巴
(俳)乙女の歌ゝ止ゝゝ　鄙公　梅侯

田草取　苗ゝゝて十四五日ゝ
カリゝれゝ上ゝゝゝ
見ゝゝ草の根土中ゝゝ
ゝゝ早く芽ゝ出ゝゝ
ゝゝ草の根ゝゝ草と
苗ゝゝ十四五日ゝて草と
其後ゝゝ草ゝゝ
報鋤ゝゝ。季ハ六月ゝ

(雪)新撰六帖　知家
ゝゝのゝゝ稗ゝ
ゝゝゝ田ゝ
(俳)ゝゝゝ田面ゝ竹戸

早苗　若苗　三百ノ初ナ
ゝゝ　ゝゝ　古寺
○四月ゝ多五月ゝ人ゝ苗ゝゝ
日程ゝ八九ゝゝ一ゝ成ゝゝ

(寄)夫木
あさとりハ弥百の小田ニ社わかれて　人丸
苗まつのまゝ苗をとりつゞくなり
家集　取早苗聞郭公　西行
わくくさ手声倫杜女のそゝこれて
山田のさなへとゝ向まよそえるる
兼久五十首　早苗夕　定家
うへて手みどりのさなへ星ゝゆ
ゆふくれのくさきふのかとものなる
夫木　採早苗　為家
とやまふくさつきもをすゞる竜
こゝろワかぬ光ぞさゆるしく
寛元寄合　社辺早苗　知家
さのとりれたにほすろく今をいけしそ
おうへのさなへをうけらもしらん
建保寄合　夕早苗　範宗
とりかへのやすむのそらは夕あかね
さるへようこそとれどかくれ
家集　雨後早苗　仲正
雲ふかるあめはなぐりたりし門田ハ
こずゑおきしぞよぶれてふかる
常盤井百首　門田早苗　仲正

かぎりるみつこのとらるゝかみゆ
つひてのえぞこれさるへくる見よ
(詞)摂州ノ小田。老苗縄。わすそ小袖。
小山田。濃ゐ。兎なる。谷門。里とろ。
老松をみて。きのみちのみちや花を。水。
よ町田。猿の男。五月雨ニ青田
(連)早苗とる小ぐらき民のとやまれ　宗祇
「ふる」そろのてのあたなの田あてあ　宗長
(俳)まえたるせいハ夕風早るゝよ苗ホ　芭蕉
「一筋へやつまとせつもんの苗ホ　十丁
(狂)早乙女ハ早苗ひくつてうつくしの
姥ハへ茶いるる早苗乃飾ー　宗恒
△菱花(ひし)　六月菱の花ニ委しく記を故爰て略ス
△若竹(わかたけ)　△今年竹(ことし)○新竹
○竹笛(え)○竹ハ諸草の内
長ヶ高く節ニ多計(しげ)と名づく又
此君(このきみ)とも云　(詞)夫木
此君と朝そてうへしかわ竹の
千代のちぎりやたのもしき

(連)花さく竹ふもつやひろ葉小家祇

(俳)茶竹や鞍ふりかゝる茶桶山　其角

〔茶竹や雪の色こそまさりけれ　乙由〕

〔茶弁のうゝこそたゝ雀うる　亀洞〕

○竹をうゆる竹解日かぎ〳〵す

正月朔日二月二日十二月十二日か

うゆべ〳〵雨後うゆまい活〳〵安〳〵

○信濃か竹を〳〵あれども篠の竹をう

り正月かも松ぐり　**篁竹**

立て竹いかぎ〳〵す

細長く節ひきくして直なり矢竹か用ゆ　**業平竹**

雄竹の如く節ハ雌竹か似〳〵

女竹男竹の見分るさゆ業平と云

観音竹　業短くは　**志ゝ竹**

かも竹　**布袋竹**　太きか〳〵竹と

れ如〳〵　節ねのぐ〳〵ま

つそ作り　**竹の皮散**　季に

竹のぐ〳〵

用ひき〳〵法竹の皮いるい

六月の季とす竹の皮をいらふ

艾　異名　冰臺・蓂草・繁草・

白蒿・ハ艾・艾蒿・

ぐ〳〵ひてい季ゑ〳〵

(季)艾の中れ病ハ絶なく〳〵ゆる

ものの中れ差ぬ〳〵て　時頼

○俗蓬の字を書く蓬ハ物名

種類多〳〵千年艾・ことゝもこゝて

草花蒿・白茨・角蒿等ゑ

真菰刈　異名　茭草・蔣草・

ぐ〳〵ぐ〳〵つ　ぬこもゝ子ハ雑ゑ

○古代俵ハ作る今稲藁を以て

作る物をゝ〳〵ハ見作る

真ハ巻る詞ゑ〳〵ゝ〳〵

○今ハまゝゝまくるのゑ　○奥

州ゑハむ〳〵昔蒲ゑ〳〵端午ハ

これを軒ハ昔ゑ

(季)古今　貫之

真菰ゑる淀の沢ゑ雨降ゑ

はまようてんまさるひづ 忘

能 朔日新主蒜いろ仕ぬ中素

石菖 能 石菖のゆハぐれ 白ハ泉ニ飛 秘伝

和布刈 正字石蓴 ○紀州 加田より出るとめぐり

海帶刈 ようかう又ようろの類なり 免い

とかえの数ふようて名づく ふようかいかりとるなり

李子 名 嘉慶子。明李。来禽。 舞 居陵迦。沈朱實

詩 李之詞 唐 李嶠

潘岳閒居 日 潘岳字ハ安仁ト イフ此故事文選ニ アリ漢ノ王戎戲百辰 王戎ガ 代ノ人ニ 事下ノ

故事 蝶遊芳徑馥芳徑ハ花ナリ 蝶ノ咲ク徑 バタカウバ シクヨフ

鶯轉弱枝新 弱枝ハ カヨハキ 枝ク

葉暗青房晩 青房ハフ サナリノ李 ナリ

ノ実コノトキ葉々 レゲリマスナリ 花明玉井春

李花ハスクレテ 鮮明ニ 方知有靈

李花ハスクレテ 鮮明ニ 方知有靈

幹李樹ノミキニハ神 幹ニ吳ノキハメラアリ 時用表眞

人ソレユヘ李ヲ神仙ノ 一人ニタトヘタリ

李故事

傍花 晉ノ王戎七歳ノ時 諸ノ小児ト道傍ノ

李ノ樹ノ下ニテ遊ブ李子ノ多 キヲ見テ枝ヲ折ル小児競ヒ走リ

我先ニト拾ヒ取ル中ニ王戎バカリ 取ラントモセズ人ヲノ故ヲ問フ王戎

ガ云ク路傍ニアル李ニテ人モ取 ズシテ然モ子ノ多ナルハ必ズ苦キ

李ニテアラン此故ニ我ハ取ラズト 答フ果シテソノ李苦クシテ一ツ

モ食レザリシト 世説ニ見ヘタリ

龍血 李ノ肉厚フシ テ核ノナキハ龍ノ耳ヲ割ル 其血ノ落タル所ニ李ヲ生スルト

イヘ 鑽核 ヒ安豊好李ノ木ヲ持テ價貴ク貴ル

他人ノ種ヲ植ン事ヲオソレテコトゞクノ核ヲ鑽タリトス

李 接法 桃木ふとくなるの枝とはぢかむ実られるぬれもあはし

楊梅 異名 杌子。聖僧やまり 紅白紫の三種あり泉州大義ヨ生ぞろりの九佳あり

俳 ぬるりふ出るる色紅の毛永我

詩 楊梅五字對句

冬花採盥橘 冬ハ橘ノ実ヲ花ニタトヘテトリシゾ

夏葉摘楊梅 夏ハコノヤモニシク物ナキヨツテツミトルナリ

詩 仝七字對句 詩礎

樓閣兩山搖碧落 嬌暮春 クモマノニツヤマニタカトノアタリ

楊梅千磵瀉紅泉 一庭花 オホクノタニガハアカイヤマモ、

高林帶雨楊梅熟 故園春 ヤマモノハヤシアメニウルホフ コキヤウノハナ

山岸籠雲謝豹帝 帶雨閑 クモノハラ〳〵トタツヤ、ノケシキニ アメニサク

詩 楊梅を詞 唐李嶠

折来鶴頂紅猶濕 揚梅ハヨクヨ天雀ノ丹頂ニ似タリ

得到長安 荔枝ハ長安ノミヤコニ到着スル事ハアルヘシ

破龍睛血未乾 神竜ノヒトミニモタトヘタリ

味美味ヲ知ルヤラバ 揚貴妃ガ此揚梅ノ 若使太真知此 荔枝焉

氣條桃 あくのゝれ子を振るをみの実多く大いこ

無花果 映日葉。優曇花 花をくゝて実なる

初青く熟をれば紫黒色味甘淡〳〵○涅槃経ニ云く佛出世

い烏曇花を喩へて稀なる事なり一
説に即この無花菓の事なり一
千年ふして一度花を開くなど
いと妄誕なり（云）ふ椿をみぐく
君が代は百回り咲く
優曇華の花乃ちなる

天仙菓

和州山中にあり花なくして実
をむすぶ枇杷に似て小ぶり小
児好んで食ふ

枇杷

（俳）風この花なりて枇杷ちる
光廣卿

毒虫に刺されたる治法

刺されていたみ苦しむ時
に枇杷の核を舐ませてこれを
はくべきなり頓て治す

（詩）枇杷五字對句

楊柳枝々弱　嫋々碧海風
枇杷樹々香　濛々緑枝香

（詩）全七字對句

詩礎

回看桃李都無色　對春溪
喚得芙蓉不是花　正滿林
万里青障蜀門口　味尚酸
千樹紅花山頂頭　溪水流

青梅

（連）青梅の葉合よりのいろ弘紹巴
（俳）嬉しさ葉ごれ梅の一つなる　社国
狂　青梅をとめてふはもぐ
ちらしてんやまりしてうら　国九

（詩）青梅之詞

天賜胭脂一抹腮　胭脂ハ紅粉ノコト
盤中磊落笛中哀　落梅
イフ笛ノ曲アリ
雖然未得和羹便

盛毒和羮ノコト書経ニ見ヘタリ　曾與將軍此渴来毒酸ノ渴ヲヤメシ故事ナリ將軍ハ曹操ノコト

ライ
アグ

羅隱

杏子　甜梅ぷりくいつぢハ味甘く梅ふつぢハ酸し根のあさくるのるり石を根ゑ置てかりしにをれハ実多し

櫻桃　紅色ゑるゝ朱櫻と紫色細黄点あるものを紫櫻と名づく味尤美し黄ゑるを蠟櫻といひ薄紅を櫻珠と名づく

○中夏天ゑる含桃をとるむといひる事あり礼記ゑ出ゑり　含桃ハゆすらうめのこと

詩　櫻桃之詞　王維

勅賜百官櫻桃

芙蓉闕下會千官　御殿ニ官人ヲ集メ會宴アリ

紫禁朱桃出上蘭　禁庭

三ツ櫻桃絶是寢園春薦後ヲ賜フグ

春薦先祖ヲ春ニクルナリ　非關稻苑鳥啣殘　春夢ノヒモロギニシテ鳥ノツキノミニハ非ズ

歸安競帶青絲籠　退出ノトキ拜領セシ籠ニ入レカヘルグ

中使頻傾赤玉盤　テツカハスシ

飽食不須愁内熱　コヽヲタベレバ内熱ヲヤムキツカヒナシ

大官還有歲將寒　高位ノ官人ハアトデヒヤリト砂糖ヲ用ヒルナリ

桑實　正字　桑椹

青小柚　青く小さ

蠶　柱　こトかとの冷ひ合せ合せ云ハ云ハに　たぐかくくと笑ひ方ゑる唯正

生胡桃　方　新撰六帖ニ毎ゑくれ法ひと胡桃のせんかくみ

扨ハんかへ　光俊

早松茸　五月ゑ出るを

〻四五月雨後に生ずると早初と云

俳　風流なる花や秋くさ　早松茸風流軒

茄子

異名　崑崙瓜　草鼈甲　俗諺に秋茄子嫁に食ふな

をるとこそいいかしへうい
ひはとハ一事ニ万乗集
の中にこと葉の

狂　秋茄子ひとりもとつゆとぞ
物よいられず　棚おそくこと

俳　ちかやうの月に茄子の味は花風軒

狂　このうつくしき茄子の色をしらされの
ちくふはしむ家入とぞ思ふる　赤得

初茄子

異名　新茄　和糸茄　水茄　早く出るのこと

俳　一日小二ツ　黄くさり　初茄子　一池
ぬうみそふくまとかくこん　九茄子　晋子

瓜の花

雌瓜　越瓜　姫瓜　浅瓜　胡瓜　をゝて花咲

る瓜実の所よりしく　まるす

俳　夕ぐれも物ふもはぎ瓜の花芭蕉

ゝのと出く　る人
もれは瓜乃茎支考

早瓜

浅瓜　白瓜　干瓜　青瓜

夫木　定頼

山城のとこの口うれ瓜はくと
こゝろうりとゝ人おりそ初るる

狂　浅瓜をこゝ[illegible]てゝ人い懐笛も
ひ中りくとうりにくるる宗輔

胡瓜

黄瓜　祇園の氏子ゝれ
を食ふ事を忌む慣
るうりいくべく瓜の文い即木瓜
の花に形ゝて織田氏の紋ゝ
信長祇園を再興して自己の紋
を社に付られる神社の紋ゝ

姫瓜

色白く其ゝ姫瓜と云　小児戯に画ゝ玩具と
ゝと就草子ゝ[illegible]きの〻
瓜に似ゝ児乃ゝ云

狂　姫ゝいの月ゝ瓜ゝ
ゝかくれゝ金乃丸新

栗蒔　旬ふむこぶい夏くす　夏栗い三月ようり

五月まそまく　秋栗い六月下旬ようり七夕頃ままく

稗蒔　五六月時ときざめ　ざまくしてうくざき

ふるめ　洪水或い旱損なしくの時苗のあくく作りてうさくく

秬蒔　四月五月まく　小きひい六月ふもまくく

胡麻蒔　四月五月雨ふりてこめてしあり時まくとはします

種植　秋大豆　秋小豆　櫻　楠　松　茱萸　豆　**移**

栽　菊　椿　梨　植　昏　**壅培**　橘　**揖**

菊　牡丹　芍　葉　**挿木**　梅花　芙蓉

茶　石榴　櫻　桃　薔薇　山梔子

梅雨の中枝を切て地ふさ良くく活す

収採　蓮房　沢泻　杜仲　麥　葛　菱　乾漆　藍

生類

此部ふい五月の諸の生りものとしるす

獣狩　躾狩　照射　火串

狩へ鹿士ふい四季ふあり

夏の狩と苗とふ王者法度の狩ふ初にて即獲物い宗廟ふ供

下い士庶ふ命へ本手の人ける心念

ととふいくも夏い殊ふ苗ふ損ぜんと

恐て是を防ぐ故ふ季ごとの狩

ぐ〜ふ狩ひ狩ふ夏ふの狩ふ

ふもしくふい夏のくくふ

火串といふりのふ火をとり

て山中ふ入まば鹿をの火を

ふ向を弓にて射て取ること

いふり

夫木

久さしいこりしたるこ作りへさ

中ど深しくくや深ってまいへ

小舞

家集 照射及曉 頼季

ともせどもよらぬもまどねいさうぐふおふさうらむもかひなうりけり

㊞ てらん。新光。すゆるか。ともし。

さん志かを志かまちふかるる。志けくさを

照を 木の間 木のまるかかるか。木の間を

てらす。夏山。なつ山。志げ山。こゝろ。

おもはせて。さつを。将の妻おもふ鹿。

とりしの松。おかは川さき。星 木のまのくれしを

草ふかえそうり 簑上はよの世 さつをのつまを おもはむ 志も

藤のとりふすまかま言ひ 火かれかえいまさよせつ

狩人。妹。いてうら。火串 さこと 夕ざれ。出る

㊞ 連 志の浪と火をとりも火串 鳥棲

㊞ 俳 うたれぬ鬼を忘れそ火をともす 其角

女房の杢すする火串かな 白飛

㊞ 狂 的よりもとりより新ふ飛んで行

鹿子の星やいふそうるらん 白虎

△ 鹿子（かのこ） 鹿弾（ろくえん）。鹿の子え

㊞ 俳 笠のりふ母の乳とのむ鹿子かる 立志

△ 魚簗（やな）

打（うつ） 魚梁は川中え木をうちて網をしけて魚を取此木をおへ

㊞ 夫まそ宍さ秋りかくをとゝよせてあまんの川系かおかふなり 光俊

△ 水雞（くひな） 種類数多あり此頃かくしの雀より小さく大さて

淡黄（うすき）赤色を帯ぶむさ白く尾短く足長し夜鳴て且つ達す

其声人の戸をたゝくごとし

㊞ 夫木

夕月夜秋の川辺しまそをみてのぞふちく水鶏かなう 為兼

家集 海辺水雞

里のなまいまるとの浦ふさきれてたゝくみ鶏まきそうれそう 仲正

拾玉 水雞何方

小夜更て扉も定ず手たゝくかる人まいおいし水鶏あやかん 慈鎮

亞槐 水雞驚眠

夏の夜かとぶこんと枕れ人をたゝく水鶏ふ出あり内ある 雅親

㊂詞 鳴。たくひなきくろく。ふくろう人。
夜 夜やくつき。夜とんたくく。
水鶏叩。今井川の戸。客の戸。
槙の戸。月 月夜さす槙水鶏さくく。
池月に水鶏わさまる。人たたくよ。
日くらくたたく槙 十二月にあるに 五月 水鶏とおり
夢中なる筆 とされ候 蝶夜なる。郭公にかくる。
里の篭。水鶏。夕月夜。眉の妻戸
竹田の里

㊂連 みな鶏なく月は紙わかかなか　宗祇
句 ひくる峰夜かくて旅の朝戸かな　宗牧
㊂俳 夜あけを母待つなる水鶏　其角
るきそは声の似あはぬ水鶏かな　捷身
㊂狂 すりや恰今くいろも親されて
ふくるるともゆる孫や水鶏　朝笑

△黒鳧（くろがも） 大きくまんて黒くを るふつべあり 味美ならず

△鳧子（かもこ） 俗鴨とかくは誤なり 野鴨は一名なり

△軽鳧子（かるのこ） 同上

△水鳥巣（みずどりのす） 水鳥 古巣よりかへれば巣も句に結ぶり 鳥の巣は春なり 鵜さで かも 水鳥く

△浮巣（うきす） 鳰の巣ぇ鳧に似て 少し芦の茎とあり
㊂俳 てきらふ水にまさかひて上下を
そよぎて蝦の振舞浮巣は　一色

△諸鳥毛を替（しょちょうけをかう） △羽脱鳥（はぬけどり）。此頃諸鳥の毛
㊂俳 かいらんさて羽ぬけ落るに鼓は羽抜鳥
羽ぬけるなくあわうそいて鵜　其角

△毛を替鷹（けをかうたか） 此頃より春て七月までに生をん

△鶯収音（うぐひすねをいる） 四月の部より入 俳書も不似とも記

月令 今月 鵙鳴初（もずなきそむ） 伯勞 伯鷯 とせり
伯趙。博勞。鵙。俗に百舌鳥とも ずと訓ぶるは非なり 百舌鳥は

はぐみて捨芥に有もず鶉の
とぞふりは秋なり

巣 葦原に巣 △蛆 みえ月のなり ふんどの むしなり

△初蟬 △蟬の初声。此ころ早くなくといふ

(俳)初蟬や笛に似たるを十文字 其角

△蟬 (円) (名異) △空蟬 齊女

蟬に五徳あり頭に緌あるは文也露をのむは清く時節をたがへを鳴は信也黍稷を享ざるは廉也巣居所を穴にせざるは倹なり

(歌)新古今 摂政太政大臣
秋ちかき気色の森に鳴蟬の
涙の露や下葉そむらん

夫木 俊賀法師
夕づけの雲の林にたえだえに
蟬の羽のもとにあれそなくきこゆる

亀山殿七百首 樹陰蟬 有北朝臣
夏ふかく茂る木陰になくせみの
こゑも涼しき色のゆふ暮

(詞)鳴声すゞし。梵声 林木にす
あつし。耳かしましく。夏山。蟬の羽衣。声さわぐ。梢に鳴く。らはしくれ
松風の声に似たり。羽ふるへ。露。こがれ
なきまさる 風 雨 まちて 雲の林。夏山。夕日。相坂下

(連)蟬の羽のうすきおもひに人の手する 紹巴

(俳)隣かし山本悲しや蟬の声 其角

(狂)帆柱にとまりてもよしや船国の
とのてぞ人に蟬がとりつく 春房

(詩)蟬五字對句 同上

客吟孤嶠月 蟬噪數枝風
盤雲雙雀下 隔水一蟬鳴

(詩)蟬七字對句 詩礎

數家茅屋清溪上 千樹蟬聲落日中
有蟬聲 夕陽中

詩 蟬之詞 唐 虞世南

飛緌飲清露 流響出疎桐 居高聲自遠 非是藉秋風

コレ風ノフクフカ又ニハヨラヌグ

蟬故事

齊女化

齊王の后王を怨めるしおくて死す化して蟬となり樹に登りて鳴くゆへに蟬を齊女といへり

飛集冠上

蟬の朱冠事舎人となり後中書郎に除せらるる時に飛蟬有て冠上に集るゆへ蟬の飛寺

鼓虫

小さき黒きをかくべく水上をおよぐるものなり

小鯨

鯨の小さきなり

蠨子

形小さき蛛の如し

水馬

雞虫 餳賣ると云池川よりの尾も頭も共に黒赤色なり雞節に似たり一説味甘く餳の如しともいへり

蟭螟

小さき事たとへん方なき虫となり故に蚊の睫に集り居るとかいふ

蛇脫皮

ひるの皮なり

髮生妙方

饂飩の粉を水にそなへ蛇の衣をよくなしの廣さに切り右のうどんの粉かけて付たる所にたれば髮をはやす事妙なり

必用

此部よい五月一ヶ月要用の事となるを

破軍向方

夜五ツ午ノ方	夜四ツ未ノ方	夜九ツ申ノ方	朝六ツ亥ノ方
昼八ツ卯ノ方	昼七ツ辰ノ方	暮六ツ巳ノ方	
昼五ツ子ノ方	昼四ツ丑ノ方	昼九ツ寅ノ方	
虎ノ方	兎ノ方	龍ノ方	

日刻

午ノ日午の刻事となる用ゆべし月建なり

出行作事　西北の方ふさがりて今月天道西北に行くゆえなり

樂事　月令に曰く此月や高明に居るべし遠きを眺望すべし山林に遊ぶべしとあり夏山のけしき草木やゝさかんにさげう青くてうくるる。

○いまだあつさもちのみあらざれども至りて日い長く愛すべし

○早蕨あるもゆるぎ

○螢見諸神諸社のけい

○五月雨をつくべしこれあるて来り出る同じ心の友どちかくりあん書など見るもよろしきたのしきあるべし

天氣　此月袍雲起るべし舟人これをさくる是暴風

稻豆宜し

○當月不熱十一月不凍

○月内寒ければ早れば兆し

養生　今月以後天氣熱ず漸々ゆるり謹て風地に卧し生冷の物を食すべからず是をおもせば悪疾癰疽を生ず

○此月屋根に上る事を忌む精神を脱す

○滋味を薄くし和を極る事なれば者欲を節し天樞中脫に灸とぢ大暑のゝゝえにあつしをもて保養すべし精氣を放散ずしむ

○風に保嵩すべし遠望すべし高明に居すべし

衣服　當月四日まで袷を着す五月朔日より帷を着す裙浅黄

女衣服　四日まで袷を着るは男子と同

時の衣　菖蒲衣濃紅　杜若衣紅黄　棟衣表紅裏青

夏月衣服の黴を去る法　冬瓜の汁かけて洗ふべし能おちる

又法 枇杷の核を細末にして
へそとく去るなり 又法 梅の
葉を煎じて洗ひてよし

青梅枝葉共ふ久く貯ふる法

青梅の枝折を葉も実も藁
にそなへ巻ふて別ふ梅と皮む
きて水ふ漬し醋と出し其醋
一升に寒の水一升二合和して
漬てとじ入用の時とり出し水
に生るべし葉も実もみちびし
てよく持つ

烏梅と製する法

青梅をとり皮とりぐり核を去り
かごふ入火上ふほり置て後ちあ
用ひ

年中青梅を貯る法

青竹
を二つふ割り青梅を入れ口の如
く合せ藁にそなへ其上を山土
ふて塗り古い地を堀りて埋め置
べし来年もそれ損ぜずして持つ
用る時い竹を引きり入用ひく取
口の如く埋め置べし

五月飲食料理献立

好物 温暖の物を食ふべし此月腹中却て冷物よりこわるべ

禁物 冷物及び生瓜蜂蜜を忌む○びとと焼青一時ふ食ふべしぞ

谷川の停水を飲べしず魚鼈のとぶし水ふあり是とのゐい癥こ多

料理

汁 小そうり 竹の子 焼物 こうさんぜう 丸ひさ 鯛すし 鱠 たい 赤貝 白うり 清汁 むとさぎ 塩ひぐう

たい ちさ けづり牛房 かいこうり

差味 すぐき 松茸 あわび 白うり 抽 ぎうな 出汁 ひぐう 煮物 もぐき切り 竹のこ

吸物

たつくり
あらざ
やきあゆ
こけのこ
さがしめ
小いしかき
去そ

和

青えだ
すいき
うづら
きうり

會物

たつくり
さくげ
そこなへ
びくなへ
たこ
くらげ
きろくげ
めさのへ

小えび
ほうろく
あとまろ
あらこい
あらこあへ
なるがれ
うけて

三三さかづき
いう
青あへ

精進汁

もろきんぎう
もずび去そ
ちくさのふ
きろくげ
彩さくげ

清汁

漬松あ
しそ
もんこ
こやうが
さま
上ふ
きろくげ
うど
ふき
豆ゆ
うど

膾

白うり 椎ち
たうん
うり
ぎうが

差味

かんてんびえ
まさびかいろる
椎ちり
もろうが
ひろさき
あげ
ぎんなん
ちくさのう

煮物

ひろさき
去椎ちり
ぎんなん
梅子
きさげ
去そ

ちくけのこ
つまうえる
山ゆいも

和會物

ちくさ
えんぎう
しそ
ぎうが
かもろう
ゆば
あれふ
豆へ

かいどう
えひやう生
ぐるあへ
牛房小品
たうえさい
うど

吸物

しめじ
しそ
かくさい
ちくさのこ
早まろけ
ぐるどこぬ

五月用意の品

左之

貯生姜法

竈の前の上てふく
堀を底之あらめるてしまを其
上之生姜を置き上さかを
てよう久しをたくえうくるへ

生筍貯る法

生筍を桶之へ入ここ
そ河瀬のうやき所之埋つを
石を重しかけ置へしいろ逆
生之て能さりのありまうこ茄子
の乾貯へやうも右之同し

薑塩漬徽ぞる法

薑をよく
ぐふきざこくよく水気を去りて
梅酢之漬べし漬るよく茶と
少し縮ぬ之はくを底へ入置
べしかくのごくをれば一年を経

でも鱠にすべし

魚玉子塩法

極暑の時魚と三枚におろし大鉢に水一盃入置きて塩と入るべし其後玉子と入て見べし玉子沉ひるもの又塩て入るべかゝんよけれ玉子うき物也

このかけんにて魚うくたるの物也

梅酒の方

古酒一キ　梅を干

砂糖心次第　右梅少しも疵のなきを見て花のごとくとり飯粒ごとして一夜灰汁に漬洗ひ水氣をぬぐい酒へ入るなり

飯の饅ざう法

莧の巣と飯の上に若へて一夜を経てもとくなり

蛸魚を賜ふる法

餛飩の粉をうすくして其中に魚をはさみ油に入れ置い損をろ事なし

又方　寒中の雪水にひたしおけば久しく損ぜず

五月部終